

辞世

～その刻、
先人たちは何を思ったのか～



第1首目 西郷 隆盛

二つなき 道にこの身を捨て小舟^{をぶね}
波立たばとて 風吹かばとて

(二つとない命であるが、この身を捨て小舟に乗り、波が立とうが風が吹こうが行かねばならない)

——明治維新にささげた約50年の人生

2018年は明治改元150年目にあたる節目の年だそう。NHKもそれを意識してか、今年の大河ドラマの主人公は西郷隆盛である。ドラマでは、西郷が時代の荒波に翻弄されながらも、持ち前の大らかさと正義感で新しい国づくりを目指す姿を描いている。

今回取り上げたいのは、西郷が若かりし頃に詠んだ辞世である。どこか破れかぶれになっているこの辞世は、従来の豪気な西郷隆盛像とは異なる印象を与える。なぜこの辞世が詠まれたのか。詳細を語る前に、ざっと彼の人生を振り返ってみよう。

文政10年(1828)生まれの西郷隆盛は、始め薩摩藩主島津斉彬のもとで条約問題や一橋慶喜將軍擁立運動のために奔走していたが、斉彬の急死や安政の大獄などにより一転して窮地に陥る。この時、護衛していた勤王派の僧月照とともに錦江湾へ入水自殺をはかり一命を取り止めている。

その後、第二次長州征伐で坂本竜馬を介して木戸孝允と薩長同盟を結び、慶応4年(1868)の勝海舟との会談で江戸城無血開城に成功する。維新後は、明治政府の要職を歴任し日本の近代化に貢献するが、明治6年(1873)の征韓論争に敗れたことで下野。そして、明治10年(1877)に不平士族らに推される形で起こした西南戦争に敗れ自刃した。

——「土中の骨」となった後半生

くだんの辞世は安政の大獄の年(1858)、月照と夜の錦江湾へ身を投じる直前に詠んだ歌である。

実はこれより数カ月前に主君斉彬が急死した際も、西郷は殉死しようとしたことがあり、それを引き止めてくれたのが他ならぬ月照であった。月照は薩摩藩とゆかりのある公卿近衛家と昵懇の間柄で、

西郷が京都で活動する上で重要なパイプ役だった。

そういった交流があり個人的に恩義も感じていたため、西郷は月照が幕府に指名手配されると、薩摩藩へ彼を匿うよう願い出た。しかし、幕府と対立することを恐れた薩摩藩が命じたのは、暗に藩外追放や国境での斬り捨てを意味する「東目送り」。命令を聞いた西郷は絶望感にさいなまれたことだろうが、月照は潔く己の運命を受け入れたという。

月照の態度で西郷も腹を決めたのか、日向へ進む未明の舟上で辞世のやり取りをした後、両者は抱き合って海中へ「この身を捨て」た。この「捨て」という言葉には、悲しみだけでなく怒りの感情が込められている気がしてならない。また「波立たばとて風吹かばとて」行きたかったのは、海中でもなくあの世でもなく本当はもっと別の場所だったのではないかと、生への執着を邪推してしまう。

だが、当時の西郷の置かれた状況を鑑みれば、無念未練が残る死出の旅路だったのは当然のことだろう。さらに言えば、一見破れかぶれなこの辞世も、裏を返せば西郷隆盛が高い志を持ち、それを完遂するために己の全てをかけていた人だったことを証明していると思う。

結局月照はそのまま絶命したが、西郷は数日間何度も海水を吐いた末に蘇生してしまう。己だけ生き長らえたことに自責の念を感じた西郷は、蘇生直後は月照の後を追おうとしたようだが、後日友人へ宛てた手紙では自らを「土中の骨」と称し、生き恥をさらしながらも国のために尽くす決意を記している。

「土中の骨」となったことで恐れるものがなくなったのか。実際彼のその後の人生は新しい国づくりのため、まさに粉骨砕身する日々であった。歴史に「IF」はないというが、もし月照とともに彼が死んでいたら、歴史はどう変転していったのだろうか。

(執筆/ライター 青山繁樹)